

高校生の学校生活におけるこだわりが学校適応感に与える影響 ～適応感を高める要因として「共有」の機能に着目して～

The influence of adherence of high school students on school adjustment
— focusing on the function of “sharing” as a factor that enhances adaptability —

廣崎 陽 HIROZAKI Akira

1. 問題と目的

学校生活において不適応に陥るような同じきっかけをもちながらもすべての生徒が不適応に陥るわけではない。適応、不適応を左右する要因として、生徒各々が大事にしている信念が考えられる。学業が大事だと考える生徒もいれば、対人関係を大事にしている生徒もいる。将来を最も大事に考えている生徒もいれば、健康を第一に考える生徒もいる。これらはそれぞれの行動、もしくは生き方を支えている信念であり、「こだわり」と呼べる。それぞれが「こだわり」をもって行動し、それを貫くことで満足感を得たり自己効力感を保っている反面、「こだわり」をもつがゆえそれが遂行されないとき自尊心がもてなくなり不適応に陥ってしまうことすらあり得る。生徒のやる気を引き出し、保持していくため、生徒が何に「こだわり」を持って生活しているかを理解することは教師が生活指導を行う上での一助となると考えられる。

廣崎・瀬戸（2014）¹⁾では「こだわり」を「それぞれが意識・無意識問わず重要だと思い絶対的な価値を置いていて、それぞれの生き方を支えているが、その対象を完璧に遂行することが正しいと思い込みなかなか払拭できない歪んだ信念」と定義し、学校生活における「こだわり」を石隈（1999）²⁾における学校心理学の4領域から包括的に捉えた「高校生の学校生活におけるこだわり尺度」を作成し、適応への影響を調査した。その結果、学校への適応感に対し、「学習」「趣味」「課外活動」「生活リズム」が有意に正の影響を及ぼし、「対人関係へのこだわり」全般と「成績・結果」が有意に負の影響を及ぼすことが認められた。「こだわり」の対象によって適応感に与える影響が異なることが明らかになった。

「こだわり」に近い概念としては、「不合理な信念」と「過剰適応」が挙げられる。不合理な信念においては、斎藤他（1995）³⁾は、中学生のイラショナルビリーフ尺度を作成し、適応との関連を明らかにしようと試みた。結果として、「依存」「内的無力感」「外的無力感」そして全体としてのイラショナルビリーフが強いと精神的に不健康で適応も低いことがわかったが、「倫理・協調主義」においてはイラショナルビリーフが強いほど適応状態も高くなり、さらに女子の方がより傾向が強いことが明らかとなった。

過剰適応の研究においては、石津・安保（2008）⁴⁾は、中学生の過剰適応傾向と学校適応感、ストレス反応との関連を検討した結果、過剰適応の性格特徴から構成される「内的側面」は学校適応感を下げる一方でストレス反応を低減させ、適応方略から構成される「外

的側面」は学校適応感を支える一方で、ストレス反応を増加させることを明らかにした。

「こだわり」に近い概念を含む先行研究から、学校適応感の高い生徒が心理的不適応を抱えている可能性も示唆されているため、「こだわり」もまた学校適応感に影響を与えると同時に、心理的不適応にも影響を及ぼしていると考えられる。ゆえに、心理的不適応を測定する指標としてストレス反応を用い、学校適応感とともにストレス反応を測定し、「こだわり」からの影響を検討する必要がある。

適応感やストレス反応に影響を与える「こだわり」に対しては、適応に向かわせるための方法として、筆者の教育や心理臨床の経験から友人と共有することで学校適応感を高めたり少しでもマイナスの影響を減らしたりすることができると考えられる。

手塚・酒井(2007)⁵⁾の研究から、男女とも高校生にとって、学内に信頼できる親友がいることが非常に重要であり、学内の友人との信頼感が直接抑うつ感を低下させ、また学校外の親友との信頼感は社会的スキルを介して学校適応感を高めることが示された。学校外の友人に焦点を当てた研究としては、辻(2003)⁶⁾が挙げられ、その実態と位置付けを調査している。結果、学校外の友人関係に対する意識について、対等感、愛着感、安心感、連帯感といった項目はほとんどの回答者が「そう思う・まあそう思う」と回答し、女性が男性より学校外の友人関係に信頼感を有し、学校に対する安心感が高いということがわかった。また「共有」に関しては、高坂他(2010)⁷⁾は中学生を対象に友人関係における共有の対象と心理的機能との関連を調査し、物質的な共有や行動的な共有より心理的な共有が動機づけや楽しさを増加させると示唆し、気持ちや目標の共有が結びつきを強め、周囲からも認められるようになると指摘している。

以上先行研究から「こだわり」という心理も友人と共有することができれば適応感を高めることができるのではないかと考えられ、本研究では不適応に働く「こだわり」が、友人と共有をしていることで適応的に働くかどうかを検討する。その際、高校生ともなると、高校入学以前からの友人や、場合によっては、顔も知らないネット上の知り合いなどとの友人関係も考えられるため、学校内、学校外、ネット上の友人との共有の観点から調査を行う。また先行研究からも友人関係やそれぞれが重要としている領域において男女差が見られるため、男女ごとの分析を行いその共通性と差異を検討する。

よって本研究では、各こだわりが学校適応感およびストレス反応に及ぼす影響の過程において、親しい友人との共有が学校適応感を高めストレス反応を低減するというモデルを構成し、多母集団の同時分析によって男女の共通性と差異を検討することを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査対象者

調査は、関西地域にあるA県私立B高等学校200名(男子126名、女子73名、不明1

名、1年生63名、2年生137名)、C県公立D高等学校1年102名(男子63名、女子39名)に実施した。回収したデータから欠損値のあるものを除いた、246名(男性157名、女性89名、1年生129名、2年生117名)を分析対象とした。

2.2. 調査期間

調査期間は、2013年11月10日－2013年12月4日に各学校のクラス担当の教員により実施した。

2.3. 調査内容

1) フェイスシート

性別、年齢、学年、所属している部活動、習い事・その頻度、「現在はまっているもの」について回答を求めた。

2) 高校生の学校生活におけるこだわり尺度

廣崎・瀬戸(2014)で作成した高校生の学校生活におけるこだわり尺度に各下位尺度ごとの項目数を揃えるため修正を加え、「自己へのこだわり」6因子それぞれ5項目計30項目、「対人関係へのこだわり」3因子それぞれ5項目計15項目で構成したものを使用した。

3) 共有尺度

共有尺度については近藤(2010)⁸⁾と高坂(2010)を参考に作成した。先行研究から共有の機能として「関係の共有」「場の共有」「気持ちの共有」「意志の共有」「物品の共有」「感性の共有」が示され、それぞれ「行動の共有」「気持ちの共有」「話題の共有」「考え方の共有」に加えそれらのさらに深い部分でも一致しているかを尋ねる「細部の共有」の5つの観点から各1項目ずつ計5項目で測る尺度を構成した。その際、本論の定義には当てはまらない「物品の共有」の観点は外した。また高校生における共有する友人には学校内に限らず学校外やネット上の友人も考えられることから、それぞれ学校内の親しい友人、学校外の親しい友人、ネット上のみで親しくしている友人の3つの場面を想定し、各5項目計15項目とした。質問項目は教員1名と教育心理学を専攻する大学院生1名、心理学を専攻する大学生8名で項目の妥当性を検討した結果、尺度の内容的妥当性が確認された。各項目への評定は、「全くあてはまらない(1)」―「大変よくあてはまる(5)」の5件法で回答を求め。各「学校内の共有」、「学校外の共有」、「ネット上の共有」ごとに尺度得点を算出したものを共有尺度として使用した。

4) 学校への適応感尺度

大久保(2005)⁹⁾の学校への適応感尺度を一部修正して使用した。本尺度は、「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」「劣等感の無さ」の4因子30項目

で構成されている尺度である。本調査を行う際、再度因子分析を行った結果、「居心地の良さの感覚」因子から「周囲に溶け込めている」「安心する」「周りと助け合っている」の3項目と「課題・目的の存在」因子から「熱中できるものがある」の1項目がそれぞれ因子負荷量が小さく、項目から削除した。よって、本調査ではそれら4項目を除外し、「居心地の良さの感覚」8項目、「課題・目的の存在」6項目、「被信頼・受容感」6項目、「劣等感の無さ」6項目の計26項目を使用した。各項目に対して、「全くあてはまらない(1)」—「大変よくあてはまる(5)」の5件法で回答を求めた。

5) ストレス反応尺度

岡安・高山(1999)¹⁰⁾のメンタルヘルス・チェックリスト(簡易版)の「ストレス反応」の項目を使用した。本尺度は、「不機嫌・怒り」「抑うつ・不安」「無気力」「身体的反応」の4因子各4項目計16項目で構成されている尺度である。各項目に対して、「全くあてはまらない(1)」—「とてもよくあてはまる(4)」の4件法で回答を求めた。

3. 倫理的配慮

調査の目的、個人情報情報の守秘の誓約、調査は無記名で実施し回答は任意であること、得られたデータは研究以外の目的で使用しないことを質問紙の表紙に記載した。さらに、質問紙の配布時には、口頭においても同様の説明を行った。以上の点で合意が得られ、協力が可能な者のみから回答を得た。

4. 結果

4.1. 記述統計

本研究の基本統計量はTable 1に記載する。各項目における天井効果、床効果は確認されなかった。

4.2. 高校生の学校生活におけるこだわり尺度因子分析

高校生の学校生活におけるこだわり尺度の因子構造を確かめるために、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を実施した。その際「自己へのこだわり」と「対人関係へのこだわり」とを分けて因子分析を行った。いずれの因子に対しても負荷量が0.39未満である項目及び、複数の因子に重複して0.39以上の負荷量を示した項目、またどの因子にも属さない項目を除外し、項目選定を行った。その結果、固有値1.0以上を示す解釈可能な因子が予備調査同様「自己へのこだわり」尺度で6因子、「対人関係へのこだわり」尺度で3因子抽出された。それぞれの因子に対する負荷量は0.39以上であり、それぞれ「自己へのこ

だわり」尺度で6因子28項目、「対人関係へのこだわり」尺度は3因子15項目で構成された。

「自己へのこだわり」尺度に関して、廣崎・瀬戸（2014）にならって第1因子は、「周りに（かっこよく、かわいくなど）よく見られるためには妥協したくない」や「髪型や服装が思い通りにならないと気がすまない」などの5項目から構成され、「容姿」とした（ $\alpha = .80$ ）。第2因子は、「周りに反対されても自分の趣味をやめる気はない」「自分の趣味に関して新しい情報が入っていないか気になって仕方がない」などの5項目から構成され、「趣味」とした（ $\alpha = .80$ ）。第3因子は、「テストで失敗するなんてあってはならないことだ」や「テストで失敗すると自分はダメな人間であると思う」などの6項目から構成され、「成績・結果」とした（ $\alpha = .75$ ）。第4因子は、「毎日たとえ少しの時間でも体を動かさないと不安になる」や「休日だからといってだらだら過ごしてはいけない」などの5項目から構成され、「生活習慣」とした（ $\alpha = .78$ ）。第5因子は、「テストでどんな点数でも間違った部分は見直さなければ気がすまない」や「勉強していてわからないことがあればすぐに聞いたり調べたりしないと気がすまない」などの4項目から構成され、「学習」とした（ $\alpha = .74$ ）。第6因子は、「部活動や習い事をするなら上達しなければ意味がない」や「部活動や習い事をするなら厳しい練習に耐えなければ意味がない」などの3項目から構成され、「課外活動」とした（ $\alpha = .66$ ）。

「対人関係へのこだわり」尺度に関して、第1因子は、「付き合っているなら毎日連絡を取り合うのは当然だ」や「付き合っているなら他の異性と楽しそうにするべきではない」などの5項目から構成され、「恋愛関係」とした（ $\alpha = .85$ ）。第2因子は、「友人関係が少しでもうまくいかないとそれが気になってしかたがない」や「友人関係がうまくいかないと自分はダメな人間であると思う」などの5項目から構成され、「友人関係」とした（ $\alpha = .82$ ）。第3因子は、「困ったことがあっても自分で解決すべきだ」や「何事においても他人にまかせないで自分でしなければ気がすまない」などの5項目から構成され、「自力解決志向」とした（ $\alpha = .71$ ）。本調査で作成された高校生の学校生活におけるこだわり尺度は十分な信頼性を備えた有用な尺度であると考えられる。

4.3. 学校への適応感尺度因子分析

一部修正した大久保（2005）の学校への適応感尺度が元の因子構造を保つかどうか確かめるために、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を実施した。その結果、固有値1.0以上を示す解釈可能な因子が元の因子構造同様4因子抽出された。それぞれの因子に対する負荷量は0.40以上であり、第1因子「居心地の良さの感覚」8項目（ $\alpha = .90$ ）、第2因子「被信頼・受容感」6項目（ $\alpha = .86$ ）、第3因子「課題・目的の存在」6項目（ $\alpha = .95$ ）、第4因子「劣等感の無さ」6項目（ $\alpha = .82$ ）の計26項目で構成され、信頼性も十分確認された。

4.4. こだわりの変数ならびに共有、学校適応感、ストレス反応についての影響関係（仮説モデル）の検討

仮説モデルに従い、各こだわりの下位尺度である「学習」、「趣味」、「課外活動」、「生活習慣」、「容姿」が学校適応感に正の影響を与え、ストレスには負の影響を与えるとともに、共有（「学校内共有」、「学校外共有」、「ネット共有」）を介して学校適応感をより高めストレス反応をより低減させる一方で、「成績・結果」、「友人関係」、「自力解決志向」、「恋愛関係」が学校適応感に負の影響、ストレス反応に正の影響を与えるとともに共有（「学校内共有」、「学校外共有」、「ネット共有」）を介して学校適応感を高め、ストレス反応を弱めるといふ仮説因果モデル（Figure 1）について、構造方程式モデリングによる推定を行った。結果モデル適合度が低かったため、修正指標に基づきモデルを修正した結果十分なモデル適合度を示したためそのモデルを採用した（Table1）。修正したモデルを用い性別による多母集団の同時分析を行いそれぞれの因果モデルを構成した。

各こだわりの適合度指標は、GFI=.906~.948、AGFI=.775~.854、CFI=.906~.982、RAMSEA=.028~.065の範囲に納まり、モデルの当てはまりは悪くないと判断した（Table2）。それぞれの仮説モデルについて、まず、学校適応感とストレス反応にポジティブな影響を与えると考えられる「学習」、「趣味」、「課外活動」、「生活習慣」、「容姿」についての結果を記述する。

1) 学習

学習において、男女共に、「学習」から「共有」に対してパスは引けず、「学校内共有」が「居心地の良さ」（男 $\beta = .35, p < .001$, 女 $\beta = .34, p < .01$ ）と「被信頼受容感」（男 $\beta = .21, p < .01$, 女 $\beta = .22, p < .05$ ）に正の影響を及ぼしていた。「学校外共有」からは男女とも「課題目的の存在」に対し影響を与えていたが、その影響は男子で $\beta = .21, p < .01$ 、女子で $\beta = -.26, p < .01$ と影響の方向が異なり、この差は有意であった（ $z = -3.68, p < .001$ ）。

男女別にみると、男子は「学習」から学校適応感に直接のパスは引けず、ストレス反応へは「無気力」にのみ負の影響を与えていた（ $\beta = -.36, p < .001$ ）が、いずれの共有からも無気力に対するパスを引くことはできなかった。また、有意傾向ではあるが、「学習」が「課題目的の存在」に対し正の影響を及ぼしていた。

女子は、「学習」が「被信頼受容感」と「課題目的の存在」に正の影響を及ぼし（順に $\beta = .38, p < .001$, $\beta = .46, p < .001$ ）、一方で「不機嫌怒り」、「身体的反応」にも正の影響を及ぼしていた（順に $\beta = .23, p < .05$, $\beta = .45, p < .001$ ）。共有からは、「学校内共有」と「学校外共有」が「居心地の良さ」に対して影響を及ぼしていたが、前者は正の影響（ $\beta = .35, p < .001$ ）、後者は負の影響（ $\beta = -.22, p < .05$ ）であった。

2) 趣味

趣味において、男女共に、「趣味」が「学校内共有」、「ネット共有」に対して正の影響を与え（順に、男 $\beta = .24, p < .01$, 女 $\beta = .29, p < .05$, 男 $\beta = .18, p < .05$, 女 $\beta = .31, p < .05$ ）、「学校内共有」が「居心地の良さ」と「被信頼受容感」に正の影響を与えていることがわかった（順に、男 $\beta = .39, p < .001$, 女 $\beta = .35, p < .01$, 男 $\beta = .25, p < .01$, 女 $\beta = .22, p < .10$ 有意傾向）。

男女別にみると、男子は「趣味」が「居心地の良さ」と「被信頼受容感」に負の影響を与え（順に、 $\beta = -.18, p < .01$, $\beta = -.18, p < .01$ ）、有意傾向ではあるが「学校外共有」が「被信頼受容感」に正の影響を与えていた（ $\beta = .15, p < .10$ ）。(Figure 2)

女子は、有意傾向ではあるが「趣味」が学校外共有に正の影響を与え（ $\beta = .21, p < .10$ ）、「学校外共有」が「居心地の良さ」に負の影響を与えていることがわかった。（ $\beta = -.18, p < .10$ ）。

3) 課外活動

課外活動において、男女共に、「課外活動」が「課題目的の存在」と「劣等感のなさ」に影響を与え、前者は正の影響、後者は負の影響であった（順に男 $\beta = .32, p < .01$, 女 $\beta = .46, p < .001$, 男 $\beta = .27, p < .05$, 女 $\beta = .31, p < .01$ ）。有意傾向ではあるが、「課外活動」が「ネット共有」に対して影響を与えていたが、男子は負の影響、女子は正の影響であり（男 $\beta = -.19, p < .10$, 女 $\beta = .19, p < .10$ ）、この差は有意であった（ $z = 2.45, p < .01$ ）。また、「学校内共有」が「居心地の良さ」に（男 $\beta = .35, p < .001$, 女 $\beta = .34, p < .01$ ）、「学校外共有」が「課題目的の存在」に対し影響を与えていたが、その影響は男子で $\beta = .16, p < .05$ 、女子で $\beta = -.21, p < .05$ と影響の方向が異なり、この差は有意であった（ $z = -2.94, p < .001$ ）。

男女別にみると、男子は「課外活動」が「居心地の良さ」に正の影響を与え（ $\beta = .32, p < .001$ ）、ストレス反応へは有意な影響を及ぼしていなかった。

女子は、「課外活動」が「被信頼受容感」に正の影響を及ぼし（ $\beta = .48, p < .001$ ）、一方で「不機嫌怒り」、「抑うつ不安」、「身体的反応」にも正の影響を及ぼしていた（順に $\beta = .35, p < .01$, $\beta = .29, p < .05$, $\beta = .31, p < .01$ ）。共有からは、「学校内共有」が「劣等感のなさ」に正の影響、「不機嫌怒り」が負の影響を与え（順に $\beta = .21, p < .05$, $\beta = -.22, p < .05$ ）、「学校外共有」が「居心地の良さ」に対して負の影響を及ぼしていた（ $\beta = -.21, p < .05$ ）。

(Figure 3)

4) 生活習慣

生活習慣において、男女共に、「生活習慣」が「課題目的の存在」に正の影響を与え（男子は有意傾向、男 $\beta = .17, p < .10$, 女 $\beta = .56, p < .001$ ）、「学校内共有」が「居心地の良さ」に対し正の影響を（男 $\beta = .35, p < .001$, 女 $\beta = .31, p < .01$ ）、「学校外共有」が「課題目的の存在」

に対し影響を与えていたが、その影響は男子で $\beta = .18, p < .05$ 、女子で $\beta = -.20, p < .05$ と影響の方向が異なり、この差は有意であった ($z = -3.01, p < .001$)。

男女別にみると、男子は「生活習慣」が「劣等感のなさ」に負の影響を与え ($\beta = -.35, p < .001$)、「不機嫌怒り」、「抑うつ不安」に正の影響を与えていた (順に $\beta = .21, p < .05, \beta = .21, p < .01$)。また「生活習慣」が「学校外共有」に正の影響を与えていた ($\beta = .21, p < .05$)。

女子は、「生活習慣」が「居心地の良さ」と「被信頼受容感」に正の影響を及ぼしていた ($\beta = .22, p < .10$ 有意傾向, $\beta = .34, p < .05$)。

以上の事から「学習」「課外活動」「生活習慣」「容姿」においては学校適応感に対し概ねプラスの影響を与えていて、学校内共有を介することでさらに適応感を高めると考えられるが、これらのこだわりが学校内共有に影響しないという点や、学校適応感に直接正の影響を及ぼしていても、一方でストレス反応を高めていたり、学校外の友人と共有することで、学校適応感を低める可能性があることが示された。

5) 容姿

容姿において、男女共に、「容姿」が「不機嫌怒り」に正の影響を与え、(女子は有意傾向、男 $\beta = .22, p < .05$, 女 $\beta = .19, p < .10$)。共有においては、「学校内共有」が「居心地の良さ」に対し正の影響 (男 $\beta = .36, p < .01$, 女 $\beta = .31, p < .01$)、「学校外共有」が「課題目的の存在」に対し影響を与えていたが、その影響は男子で $\beta = .16, p < .05$ 、女子では有意傾向であるが $\beta = -.21, p < .05$ と影響の方向が異なり、この差は有意であった ($z = -2.94, p < .001$)。

男女別にみると、男子は「容姿」が「学校外共有」に正の影響を与え ($\beta = .34, p < .001$)、女子は、「容姿」が「被信頼受容感」に正の影響を及ぼし ($\beta = .25, p < .05$)、「学校外共有」が「居心地の良さ」に負の影響を及ぼしていた ($\beta = -.21, p < .05$)。

次に学校適応感とストレス反応にネガティブな影響を与えられとされる「成績・結果」、「趣味」、「友人関係」、「自力解決志向」、「恋愛関係」についての結果を記述する。

6) 成績・結果

成績・結果において、男女共に、「成績・結果」が「居心地の良さ」、「劣等感のなさ」に対して負の影響を (順に、男 $\beta = -.37, p < .05$, 女 $\beta = -.29, p < .01$, 男 $\beta = -.82, p < .01$, 女 $\beta = -.54, p < .01$)、「不機嫌怒り」「抑うつ不安」「身体的反応」「無気力」に正の影響を与えていた (順に、男 $\beta = .71, p < .01$, 女 $\beta = .74, p < .001$, 男 $\beta = .88, p < .01$, 女 $\beta = .78, p < .001$, 男 $\beta = .77, p < .01$, 女 $\beta = .68, p < .001$, 男 $\beta = .67, p < .01$, 女 $\beta = .50, p < .01$)。共有においては「学校内共有」が「居心地の良さ」に正の影響を及ぼしていた (男 $\beta = .34, p < .001$, 女 $\beta = .40, p < .001$)。「学校外共有」からはほぼ有意傾向ではあるが、男女とも「課題目的の存在」(男 $\beta = .17, p < .10$ 、女 $\beta = -.20, p < .10$)と「不機嫌怒り」(男 $\beta = .30, p < .01$ 、女子で $\beta = -.19, p < .10$)に対し影響を与えていたが、男女で影響の方向が異なり、これらの男女差は有意であった (順に $z = -2.59$,

$p<.001$, $z=-2.85$, $p<.001$)。

男女別にみると、男子は「成績・結果」から「学校外共有」($\beta =-.37$, $p<.10$, 有意傾向)と「ネット共有」($\beta =-.41$, $p<.05$)に負の影響を与え、それぞれ「学校外共有」は「抑うつ不安」と「身体反応」に正の影響(順に $\beta =.39$, $p<.01$, $\beta =.29$, $p<.05$)、「ネット共有」は「無気力」に正の影響を与えていた($\beta =.27$, $p<.05$)。

女子は、「成績・結果」が「学校内共有」に、有意傾向ではあるが正の影響を与え($\beta =.29$, $p<.10$)、「学校内共有」が「劣等感のなさ」に正の影響を及ぼし($\beta =.27$, $p<.05$)、「不機嫌怒り」、「抑うつ不安」、「身体的反応」「無気力」に負の影響を及ぼしていた(順に $\beta =-.31$, $p<.01$, $\beta =-.22$, $p<.10$ 有意傾向, $\beta =-.25$, $p<.05$, $\beta =-.22$, $p<.10$ 有意傾向)。

(Figure 4)

7) 友人関係

友人関係において、男女共に、「友人関係」が「劣等感のなさ」に対して負の影響を与え(男 $\beta =-.49$, $p<.001$, 女 $\beta =-.39$, $p<.01$)、「不機嫌怒り」「抑うつ不安」「無気力」に正の影響を与えていた(順に、男 $\beta =.25$, $p<.01$, 女 $\beta =.32$, $p<.05$, 男 $\beta =.33$, $p<.001$, 女 $\beta =.34$, $p<.05$, 男 $\beta =.30$, $p<.001$, 女 $\beta =.23$, $p<.10$ 有意傾向)。また同じく「友人関係」は「学校内共有」に対しても正の影響を及ぼし(男 $\beta =.18$, $p<.05$, 女 $\beta =.30$, $p<.05$)、「学校内共有」が「居心地の良さ」に正の影響を及ぼしていた(男 $\beta =.37$, $p<.001$, 女 $\beta =.33$, $p<.01$)。「学校外共有」からは「課題目的の存在」(男 $\beta =.21$, $p<.01$, 女 $\beta =-.19$, $p<.10$ 有意傾向)に対し影響を与えていたが、男女で影響の方向が異なり、これらの差は有意であった($z=-3.03$, $p<.001$)。

男女別にみると、男子は「友人関係」が「被信頼受容感」に負の影響を与え($\beta =-.19$, $p<.05$)、「学校内共有」と「学校外共有」が「被信頼受容感」に正の影響を与えていた。(順に $\beta =.24$, $p<.01$, $\beta =.16$, $p<.05$)。また、「学校外共有」は「無気力」に対して負の影響を及ぼしていた($\beta =-.17$, $p<.05$)。

女子は、「学校内共有」が「劣等感のなさ」に正の影響を与え($\beta =.24$, $p<.05$)、「不機嫌怒り」に負の影響を及ぼしていた($\beta =-.22$, $p<.05$)。また「友人関係」が「ネット共有」に正の影響を及ぼしていた($\beta =.31$, $p<.05$)。

(Figure 5) (Figure 6)

8) 自力解決志向

自力解決志向において、男女共に「自力解決志向」が「居心地の良さ」「劣等感のなさ」に負の影響を与え(順に、男 $\beta =-.38$, $p<.01$, 女 $\beta =-.36$, $p<.10$ 有意傾向, 男 $\beta =-.72$, $p<.001$, 女 $\beta =-.54$, $p<.05$)、「不機嫌怒り」「抑うつ傾向」「身体的反応」「無気力」に正の影響を及ぼしていた(順に、男 $\beta =.64$, $p<.001$, 女 $\beta =.79$, $p<.05$, 男 $\beta =.91$, $p<.001$, 女 $\beta =.92$, $p<.05$, 男 $\beta =.80$, $p<.001$, 女 $\beta =.84$, $p<.05$, 男 $\beta =.62$, $p<.001$, 女 $\beta =.55$, $p<.05$)。また、「自力解決志

向」が「ネット共有」(男 $\beta = -.39, p < .05$ 、女 $\beta = .44, p < .10$ 有意傾向)に対し影響を与えていたが、男女で影響の方向が異なり、これらの差は有意であった ($z = 2.56, p < .01$)。共有においては「学校内共有」が「居心地の良さ」に正の影響を及ぼしていた(男 $\beta = .34, p < .001$ 、女 $\beta = .44, p < .001$)。

男女別にみると、男子は「自力解決志向」が「被信頼受容感」「課題目的の存在」に負の影響を与え(順に、 $\beta = -.27, p < .05$ 、 $\beta = -.18, p < .10$ 有意傾向)、「学校内共有」が「被信頼受容感」「課題目的の存在」に正の影響を(順に、 $\beta = .20, p < .05$ 、 $\beta = .20, p < .05$)、「学校外共有」が「課題目的の存在」に同じく正の影響を与えていた($\beta = .18, p < .05$)。また、「学校外共有」は有意傾向ではあるがストレス反応に対し正の影響を及ぼしていた。

女子は、「学校内共有」が「劣等感のなさ」に正の影響を与え($\beta = .31, p < .05$)、「不機嫌怒り」「抑うつ傾向」「身体的反応」「無気力」に負の影響を及ぼしていた(順に、 $\beta = -.39, p < .01$ 、 $\beta = -.33, p < .05$ 、 $\beta = -.36, p < .05$ 、 $\beta = -.28, p < .05$)。また、「ネット共有」がほぼ有意傾向ではあるが「不機嫌怒り」「抑うつ不安」「身体的反応」に負の影響を及ぼし(順に、 $\beta = -.29, p < .10$ 、 $\beta = -.29, p < .10$ 、 $\beta = -.32, p < .05$)、一方で「学校外共有」は学校適応感とストレス反応にネガティブに機能することが示唆された。(Figure7)

9) 恋愛関係

最後に恋愛関係において、男女共に「恋愛関係」が「劣等感のなさ」に負の影響を与え(男 $\beta = -.44, p < .001$ 、女 $\beta = -.29, p < .05$)、「不機嫌怒り」「抑うつ不安」に正の影響を与えていた(順に男 $\beta = .18, p < .10$ 有意傾向、女 $\beta = .26, p < .05$ 、男 $\beta = .27, p < .01$ 、女 $\beta = .28, p < .05$)。共有においては「学校内共有」が「居心地の良さ」に正の影響を与え(順に、 $\beta = .37, p < .001$ 、 $\beta = .32, p < .01$)、「学校外共有」からは「課題目的の存在」(男 $\beta = .23, p < .01$ 、女 $\beta = -.18, p < .10$ 有意傾向)に対し影響を与えていたが、男女で影響の方向が異なり、これらの差は有意であった ($z = -3.11, p < .001$)。

男女別にみると、男子は「恋愛関係」が「学校内共有」「学校外共有」「ネット共有」に正の影響を与え(順に、 $\beta = .23, p < .01$ 、 $\beta = .21, p < .05$ 、 $\beta = .19, p < .05$)、有意傾向ではあるが「学校外共有」が「無気力」に負の影響を与えていた($\beta = -.16, p < .10$)。

女子は、「恋愛関係」が「被信頼受容感」「課題目的の存在」に正の影響を与え(順に、 $\beta = .24, p < .05$ 、 $\beta = .24, p < .05$)、有意傾向ではあるが「学校内共有」が「不機嫌怒り」に負の影響を与えていた($\beta = -.16, p < .10$)。

以上の事から「成績・結果」「趣味」「友人関係」「自力解決志向」「恋愛関係」においては学校適応感に対し概ねマイナスの影響を与えていて、学校内での共有を介することで適応感を高めると考えられる。また、一部ネット上の友人との共有がストレス反応を低減させるという結果ではあったが、共有を介し学校適応感が高まっても依然ストレス反応は弱まらず、適応感の高い生徒も少なからずストレスを抱えて生活しているということが示唆

された。

5. 考察

全体的に学習、課外活動、容姿、生活習慣へのこだわりが強いと概ね学校適応感が高まる一方で、ストレス反応も同時に強めてしまうことがわかった。また、学校内に話題や気持ちを共有できる友人がいることでその適応感を保てたり、向上させることや、一部ストレス反応を低減させることも明らかとなった。しかし、学校外の友人との共有に関しては、男女で異なり男子は学校外の友人と共有できることで、適応感を高め、ストレス反応を低減させるが、女子においては学校適応感を低め、ストレス反応に影響を与えるという結果であった。手塚・酒井（2007）によると、男子は信頼できる親友とは一緒に遊んだり競い合ったりすることを通して、自己を知り目標を見つけ、それに向かっていくと述べ、一方で女子においては友達は相談相手とするような親密な関係であるという長沼・落合（1998）¹¹⁾の指摘や、学校生活を安心して過ごすためのグループを作るという佐藤（1995）¹²⁾の指摘もある。また共有の心理的機能にはネガティブな側面もあり、その一つとして高坂（2010）が第三者からの否定的評価を挙げていることから、男子においては学校内外問わず、友人との共有を通し課題や目的を持つようになると考えられ、女子にとって学内の親友という存在がより重要な意味をもち、学校適応と密接に関わっていて、学校外の友人と共有することは重要な存在である学校内のグループから離れることになり、学校適応感は低下すると考えられる。

ネット上の友人との共有に関しては、男女共通する影響はほとんど見られず、課外活動へのこだわりにおいてのみそれが強いと男子はネット上の友人と気持ちや話題を分かち合うことができず、女子においてはネット上の友人と共有しやすい傾向にあることが示唆されたのみである。ただし、友人がいないと回答した人数が学校内で2人、学校外で18人、ネット上で112人存在し、それぞれ各項目において「1. 全くあてはまらない」で換算した。よって、友人との共有に対し負のパスが引かれたところは「友人はいるが行動や気持ちの共有はできない」と「友人がいないのでそもそも共有はできない」の2通りが考えられ、今回の研究からはそのどちらかは判断できず、解釈に注意を要する。

一方、成績・結果、趣味、友人関係、恋愛関係、自力解決に対しこだわりが強いと概ね学校適応感を低減させ、ストレス反応を高めることがわかったが、一方で学校内に話題や気持ちを共有できる友人がいることで学校適応感を高めたり、一部ストレス反応を低減させることも明らかとなった。しかし、学校外やネットの友人との共有に関しては、男女でかなり異なる影響が見られた。また、趣味に関しては、仮説では学校適応感にプラスに機能すると考えていたが異なる結果となった。以上を踏まえパスを引くことができた顕著な結果を主にその詳細を述べる。

5.1 こだわりの共有による学校適応感及びストレス反応への影響

こだわりが友人との共有によって学校適応感を高めたりストレス反応を低下させるモデルについて、男子においては、趣味へのこだわりが学校における居心地の良さや受容感を低下させたり、友人関係へのこだわりが同じく受容感を低下させるといった影響を学校内の友人との共有によって緩和できることが示唆された。

女子に関しては、課外活動へのこだわりが劣等感や苛立ちを高めるのに対し学校内の友人と共有することにより劣等感や苛立ちを低下させたり、成績や結果へのこだわりによって学校での居心地の良さやストレス反応全般に負の影響を与え劣等感を高めるのを、同じく学校内の友人との共有によって学校適応感を高め、ストレス反応を低下させることが示唆された。友人関係へのこだわりについては、男子同様、低下した劣等感、また苛立ちを学校内での共有によって高めることがわかった。また、何事も自分で解決しなければならないといったこだわりをもつ生徒に関しては、ストレス反応全般的に影響を与えるがインターネット上の友人と共有することによってストレス反応を低下させることが示唆された。

趣味に関しては仮説と異なる結果となったが、学校という場での評価とは関係がなく、そこにこだわりがあると学校適応感は低下しやすいと考えられる。一方でストレス反応への直接の影響はなく、学校内の友人と趣味の話ができる環境が学校での生活を支えることが明らかとなった。

課外活動に関しては概ね学校適応感を高める機能を有しているが、男女ともに劣等感を高めるという側面も明らかとなった。参加率や向き合う姿勢などで評価が得られやすい反面、必ず周りとの比較が生じるという点で、勝ち負けや上手下手という評価も伴う分劣等感是多かれ少なかれもちやすいのではないだろうか。女子に関しては、学校内における友人との共有を介して、劣等感を低め、ストレス反応の一部イライラや憤りを抑えるということもまた明らかとなったが、これは、澁倉他（2007）¹³⁾ が指摘する運動部において女子が男子よりも仲間ストレスを自分にとって脅威であると評価する傾向にあるという見解から、特に友人関係に対する意識が高まる高校時代における課外活動に対するこだわりは劣等感を高めるだけでなくストレス反応にも影響を与えるが、学校内の友人との共有を図ることで仲間意識の再確認をし劣等感やイライラを解消するのではないかと推察される。

成績や結果へのこだわりにおいては、目的がある分向上心をもって生活をすることができると推察される一方で、「結果主義」を堀野他（1990）¹⁴⁾ が「正答さえ得られれば良い」または「失敗は良くないことである」という考え方であると述べているように、常に思い通りの成績をとり続けなければならない、現実的にそのようなことは困難であり、学校適応感やストレスにも悪影響を及ぼすと考えられる。このことは概ね結果と一致しており、成績や結果にこだわりが強いと学校適応感を低減させ、ストレス反応を強く高めることがわかったが、特に女子に関してはこだわりが強いと学校内の友人と共有を図る傾向にあり、学校適応感を高めるのみならず、ストレス反応を低減させるということが示唆された。一

方で、男子においては、学校外やネット上の友人との共有を図るもののストレス反応を高めることになり、仮説とは異なる結果となった。

自力解決志向に関しては、自分自身の問題は他人に頼らず自分で解決すべきだということであり、やはり抱える問題を一人でなんでもしようとする時間がかかり、失敗する機会も多くなりそれらすべてに責任を感じてしまうと考えられ、学校適応感も低減しストレスも少なからず感じやすいと思われる。

自力解決志向の強い生徒は概ね学校適応感を低減させ、ストレス反応を高めるが、学校内の友人との共有が学校適応感を高めることがわかったが、女子はこだわりが強いとネット上の友人との共有を介し、ストレス反応を低減させること、また学校内の友人との共有にはつながらないものの、学校内での共有は劣等感やストレス反応を低減させることが示唆された。ネット上の友人との共有に関して、渡辺・山下（2009）¹⁵⁾ は、ネット上の友人に求める友人関係の上位に「肯定・受容」が挙げられ、女性の場合、実際の友人とネット上の友人とで求める友人観に差異はないと述べている。自力解決志向の生徒は、実際の友人に頼らず、顔のわからないネット上の友人と共有し、肯定受容されることで示唆を得るばかりでなくエネルギーを補填し、学校適応感を高めたり、ストレス反応を低減させるのではないだろうか。

最後に、男女で同じような傾向を示したのが友人関係へのこだわりである。友人関係に関しては、高校生にとって不登校のきっかけとしても挙げられるような学校生活においてとても重要な領域であると言える。友人・異性との関係において、近づく場合に多くの青年が山アラシ・ジレンマを生じており、非常に気遣いをし、下手すれば関係が壊れてしまうという不安を抱えているという藤井（2004）¹⁶⁾ の見解や、青年期において必要とされる「仲間集団」である友人関係に対する不安が自尊心を下げるという調・高橋（2002）¹⁷⁾ の見解からもそのような友人関係への懸念は適応感にマイナスに機能すると考えられる。高校生にとってやはり友人関係は学校生活の中でかなり重要な位置を占めていて、ストレス反応に大きく影響をしていた。友人関係へのこだわりは学校内の友人と分かち合えることでごく一部ストレスが危機に陥ることを回避できることはわかったが、男子におけるストレス反応や女子におけるほとんどのストレス反応には影響を与えていないことが示された。学校適応感が高まり、保持できたとしても依然ストレスは抱えたままであることは軽視できない問題であり、指導・支援に注意を要するものである。

5.2 共有の機能

今回の研究ではこだわりの共有が学校適応感を高め、ストレス反応を低下させるモデルを構築し検討を行ったが、こだわりから共有に向けてのパスが引けないことがある一方で、共有から学校適応感とストレス反応の各下位尺度にパスが引けることがわかった。

友人関係や恋愛関係においてこだわりがあるということは人とのつながりを重要視して

いると考えられ、共有しようとするが、成績・結果へのこだわりがあったりするとテスト返して目標より少しでも点数が低いと誰にも見せられないというようなこと同様に、また自力解決志向であれば他人に頼らないということから共有しようとしにくい可能性が推察される。共有できなければ学校適応感も高まらず、学業や対人関係においては学校生活において良好さを求められる領域であるがゆえ、そこにこだわりがあることで苦しみながら過剰適応をし続けることになり、「よい子の息切れ」に陥りやすいと考えられる。以上のことから学校内の親しい友人の存在がそのような生徒が学校で頑張るためのリソースになることが示唆され、指導支援の一助となる可能性が示された。

5.3 今後の課題

今回の研究において、「共有」は学校内、学校外、ネット上の親しい友人の3場面を設定し、先行研究を参考に、行動、気持ち、話題、考え方、細かい部分をわかり合えることでそれぞれ測定した。しかし、先行研究から共有にもポジティブな側面とネガティブな側面があることがあげられ、何を共有するかによってこだわりが与える影響や、適応感に与える影響も異なることが考えられ、共有尺度の精査について再検討する必要がある。

引用文献

- 1) 廣崎・瀬戸(2014). 高校生の学校生活におけるこだわりが学校への適応感に及ぼす影響, 三重大学教育学部研究紀要, 第65巻, 261-274
- 2) 石隈利紀(1999). 学校心理－教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス－株式会社誠信書房
- 3) 斎藤明夫・松本泰儀(1995). 青年前期におけるイラショナル・ビリーフに関する研究(1), 日本教育心理学会総会発表論文集, 37, 60
- 4) 石津憲一郎・安保英勇(2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響, 教育心理学研究 56 (1), 23-31
- 5) 手塚知子・酒井厚(2007). 高校生の親友関係と学校適応 -学校内外の親友との信頼感の比較から-, 教育実践学研究: 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 12, 70-81
- 6) 辻泉(2003). 近年の高校生の人間関係に関する一考察—学校外における友人関係を中心—松山大学論集, 第15巻, 第2号, 353-374
- 7) 高坂康雅・池田幸恭・葉山大地・佐藤有耕(2010). 中学生の友人関係における共有している対象と心理的機能との関連, 青年心理学研究, 22, 1-16

- 8) 近藤卓 (2010) . 自尊感情と共有体験の心理学 理論・測定・実践, 金子書房
- 9) 大久保智生 (2005) . 青年の学校への適応感とその規定要因 ―青年用適応感尺度の作成と学校別の検討― 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 10) 岡安孝弘・高山巖 (1999) . 中学生用メンタルヘルス・チェックリスト (簡易版) の作成 宮崎大学教育実践研究指導センター紀要, 第6号, 73-84
- 11) 長沼恭子・落合良行 (1998) . 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係, 10, 35-47
- 12) 佐藤有耕 (1995) . 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析, 神戸大学発達科学部研究紀要, 3 (1) , 11-20
- 13) 渋谷崇行・西田保・佐々木万丈 (2008) . 高校運動部員の部活動ストレスに対する認知的評価尺度の再構成, 体育学研究 53 (1) , 147-158
- 14) 堀野緑・市川伸一・奈須正裕 (1990) . 基本的学習観の測定の試み―失敗に対する柔軟的態度と思考過程の重視― 日本教育情報学会学会誌, 6 (2) , 3-7
- 15) 渡辺未緒・山下清美 (2009) インターネット上の知り合いに抱く友人像, 専修ネットワーク&インフォメーション 14, 11-15
- 16) 藤井恭子 (2004) . 青年期の対人関係による山アラシ・ジレンマの比較 日本教育心理学会総会発表論文集, 46, 385
- 17) 調優子・高橋靖恵 (2002) . 青年期における対人不安意識に関する研究 ―自尊心、他者評価に対する反応との関連から― 九州大学心理学研究, 3, 229-236.

Table1 記述統計量

	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差
容姿	2.73	0.28	ネット共有	3.13	0.55
成績・結果	3.09	0.77	居心地の良さ	3.49	0.76
生活習慣	2.60	0.85	被信頼受容感	2.73	0.83
学習	2.57	0.84	課題目的の存在	3.43	0.79
課外活動	3.55	0.86	劣等感のなさ	3.12	0.70
趣味	3.46	0.83	不機嫌怒り	2.13	0.88
恋愛関係	2.51	0.85	抑うつ不安	2.01	0.83
友人関係	3.29	0.87	身体的反応	2.16	0.78
自力解決志向	2.98	0.70	無気力	2.43	0.76
学校内共有	3.38	0.64	学校適応感	3.21	0.55
学校外共有	3.23	0.75	ストレス	2.18	0.63

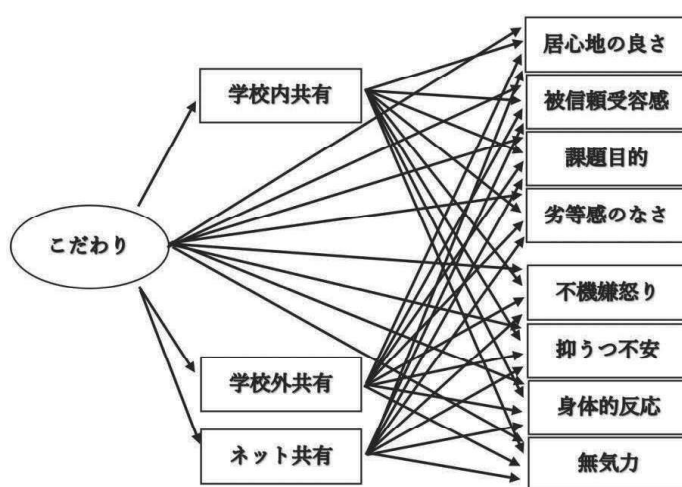


Figure 1 仮説モデル

Table 2 修正後のモデル適合度

	GFI	AGFI	CFI	RAMSEA
容姿	.950	.874	.946	.069
成績・結果	.938	.871	.932	.061
生活習慣	.974	.924	.991	.028
学習	.976	.933	.997	.015
課外活動	.965	.898	.970	.050
趣味	.956	.895	.964	.052
恋愛関係	.966	.918	.987	.033
友人関係	.963	.911	.981	.040
自力解決志向	.968	.932	1.000	.000

Table 3 多母集団同時分析のモデル適度

	GFI	AGFI	CFI	RAMSEA
容姿	.911	.775	.906	.065
成績・結果	.906	.805	.915	.050
生活習慣	.948	.850	.980	.030
学習	.948	.854	.982	.028
課外活動	.940	.824	.959	.043
趣味	.929	.831	.955	.041
恋愛関係	.937	.847	.974	.035
友人関係	.927	.823	.953	.045
自力解決志向	.922	.834	.944	.041

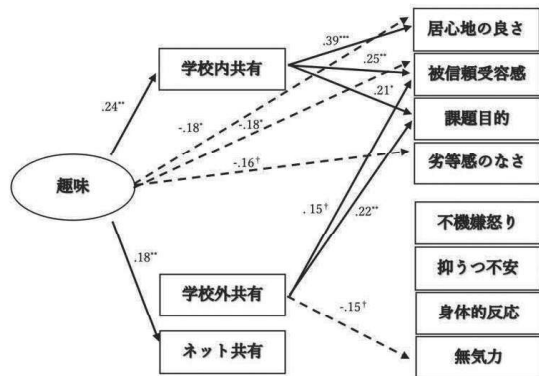


Figure 2 多母集団の同時分析 男子の趣味へのこだわり修正モデル (実線：正の影響 破線：負の影響
*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$ 以下のFigureも同じ)

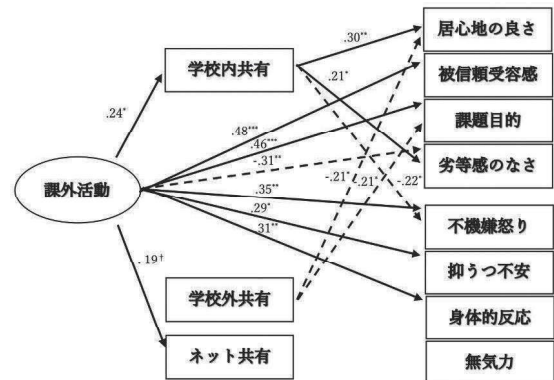


Figure 3 多母集団の同時分析 女子の課外活動へのこだわり修正モデル

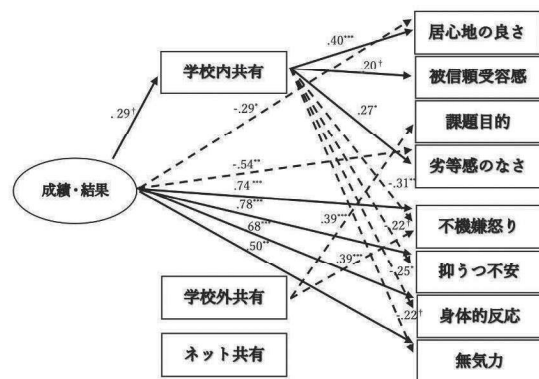


Figure 4 多母集団の同時分析 女子の成績・結果へのこだわり修正モデル

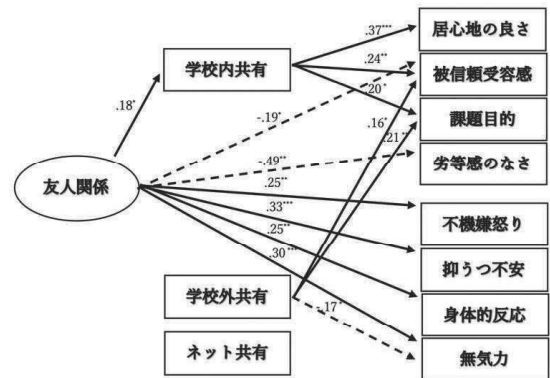


Figure 5 多母集団の同時分析 男子の友人関係へのこだわり修正モデル

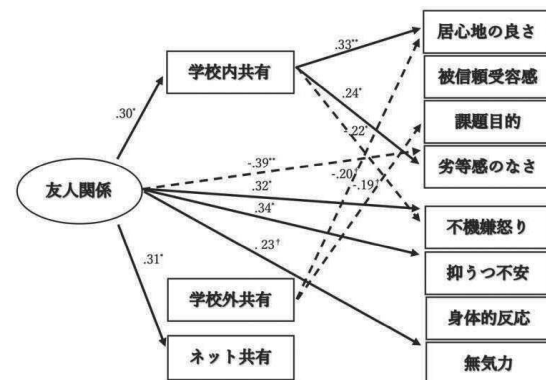


Figure 6 多母集団の同時分析 女子の友人関係へのこだわり修正モデル

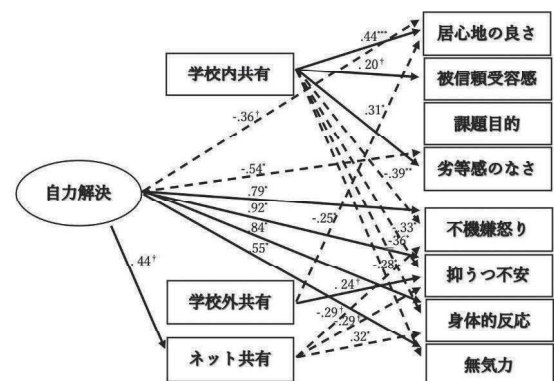


Figure 7 多母集団の同時分析 女子の自力解決志向へのこだわり修正モデル